
世界に一つだけの傘

カトラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界に一つだけの傘

【Nコード】

N1676H

【作者名】

カトラス

【あらすじ】

帰宅途中に地下鉄から降りると、外はどしゃ降り。雨だった。わたしは、仕方がないので愛妻に傘を持ってきてもらうことにしたのだが……。おちありきのショートショートです。

(前書き)

SSバトル企画 参加作品です。

投票募集期間期間 : 2009年 6月15日～6月22日

企画の説明:

読者参加型企画です。

執筆陣はお題に即したSSを書き、それを投票してもらつことで優劣を競います。

詳細は企画サイトの『概要・ルール』をご覧ください。

この小説の対戦相手は

「ガルド」さんの『』です。

作品検索は

「SSバトル企画」

「置き傘」からどうぞ。

仕事帰りに地下鉄の駅から出ると、土砂降りの雨が音を立てて地面に降り注いでいた。

少しくらいの雨なら、自宅も近いことから濡れて帰ってもよかったが、流石にこの降りようでは自重せざる得ない。

私は、携帯を手にとると結婚して三年目になる愛妻に電話した。

「今、駅にいるのだけど　悪いけど傘持って迎えにきてくれないか」

「わかったわ、すぐに行つてあげる」

妻は、半年くらい前から始めたパートで疲れているのにもかかわらず、文句一つ言わないよく出来た女房なのである。

十分ほどで、妻は慌てて家を飛び出してきてくれたのが、エプロン姿で傘を持って迎えにきてくれた。

「ごめんな、ゆこ。突然呼び出してしまって……」

「うん、いいのよ。あなた」

妻は新婚の時と変わらぬ笑顔をして傘を差し出してくれた。

そして、二人、傘を差して家路に向かったのだが、私は、傘を差してる妻に何か違和感を覚えてしまっていた。

私は妻の姿を見ながら「ハット」した。

すぐに違和感の原因が分かったのだ。それは、妻の差してる傘が違つのだ。

いつもなら、妻は私が買ってやった可愛らしいフリルのついたピンクの傘を差してるはずなのに、今日は味気ないグレーの傘を差している。

「なあ、ゆこ。ピンクの傘どうしたんだ？」

私は、気がつくとも眉間にしわを寄せて妻に聞いていた。何を、大の男が女の指してる傘がいつもと違うぐらいでめくじらを立っているのだと思うかも知れないが、私にとってピンクの傘は妻の誕生日

にプレゼントした思い出深い代物なのである。しかも、プレゼントにするぐらいだから只の安い傘などではない。職人にオーダーメイドで作らせた世界に一本しかない特注の傘なのだ。それが証拠に柄の部分には工房名と妻のイニシャルが彫りこまれている。値段も一本、五万円近くしたものだ。そういつたことで、無くされでもしたら私の心は折れてしまうのである。

「ああ、パート先のロッカーに置き傘にしているのよ」

「それだったらいいのだけど、あの傘高いから置き傘なんかにしないでくれよ。万が一にでも無くしたらどうするんだ」

私は大枚を叩いて買ってやった傘だけに、少し語気を荒げて妻に言った。

「違うのよ、あなた。置き傘はわざとしてるのよ！ だって雨降りの時に他のパートさん達にさり気なく傘さして自慢したいじゃないもう、あなたって女心がわかってないのだから……」

私は、妻の返答を聞いて、なるほど、そういう事だったのかと安堵した。

妻のこういう見栄っぱりなところに惚れてもいたので嬉しくも思ってしまう。実は、今はすっかりなりを潜めてしまっているが、結婚する前の妻はブランド品が大好きな女性だったのだ。

「ところで、働いてるファミレスの仕事は慣れたかい？」

私は、これ以上、妻に傘のことを聞いて器の小さい男だと思われたくないので話題を変えた。

「うん、みなさん、いい人ばかりで楽しくお仕事してるわよ」

私は、それを聞いてファミレスで制服を来た姿を想像してにやけてしまった。

「もう、あなただったら、何ニヤニヤしてるのよ。エッチな事、想像してたのでしょう」

全く、女ってやつは観察力が凄いなと感心してしまう。

「うん、ゆこのファミレスでのコスチューム想像してた。今度、そのコスチューム着て……」

「もう、あなただったら、バカ……」
そうして、私たちは楽しい会話をしながら家路についたのだった。

それから、三ヶ月ほどたったある日の事。

私は会社の親睦会に参加していた。

男ばかりの会社なので、華を添える為にと、お酌系のコンパニオンが数名呼ばれていて場を和ませてくれていた。

さすがに若い女の子に酒をすすめられると飲まないわけにもいかず、私はすっかりほろ酔い気分だった。

また、酒の酔いも手伝って女の子を見ると、ムラムラした気分になってくる。

そんな時、同僚が私の心を惑わすことを言ってきた。

「宴が終わったら、いいお店あるんですけど　すつきり抜きにいきましようよ」

同僚はそう言って、私を誘惑してくる。

私は、そんな店いったら妻に申し訳ないと思ったのだが、正面で同僚にお酌しているコンパニオンのミニスカートから見えそうで見えないものを見ると、そんな気持ちはすっ飛んでしまっていた。

「あ、あそこの店ですよ」

私は、気がつくやうに夜の繁華街を闊歩しながら同僚と「人妻専科」というマツサージ店に来ていた。

しかし、いざ酔った勢いとはいえ店の前までくると、やはり妻に申し訳なく思い私は躊躇してしまう。

「やっぱり、やめとくわ」と言いかけた時、空から冷たい滴が降ってきた。はじめはぼつぼつだった雨が数分もしないうちに大粒のものに変わる。

「さあ、濡れてしまいますので、中に入りましようよ」

私は、同僚に後ろめたい心を押されるように風俗店に入ってしまったのだった。

それから、一時間後にはヘルス嬢の濃厚なサービスを受けて、私はすつきりしていた。

嬢のいた個室を後にすると、先に案内されていた同僚が待っている待合室に行く。

「まだ、外は雨降ってるみたいですよ」

私と同じく、すつきりした顔の同僚は待合室の窓から見える雨粒を見ていった。

「なに、心配することはないですよ。店のボーイに言って傘借りましょうよ。また、店に来ると言ったら喜んでビニール傘ぐらいなら貸してくれますよ」

私が雨粒を見て心配そうな表情をしていると見てとった同僚は、そう言くと、ボーイを呼んで傘を貸してくれるように頼んでいた。

すぐにボーイは二本の傘を用意して私たちに渡してくれた。

私は、手渡された傘を見て、思わず声を上げてしまった。

それは、一本はコンビニなどで打ってるビニール傘だったのだが、もう一本は見覚えのある傘であったからである。

私は、ビニールじゃない方の傘を同僚からひったくると、柄の部分を確認した。

そこには、ラフレシアと言う名の工房名と妻のイニシャルが彫り込まれていたのだった。

そう、その傘は紛れもなく、妻にプレゼントした世界に一つしかないものに間違いはなかったのだった。

「おい、この傘は一体……」

私は、食いかかるようにボーイに聞いた。

「ああ、その傘っすか、それは、確か先月まで働いていた女の子が忘れていったものなんですよ！ もう取りにこないと思うので、使ってくださいよ……」

その言葉を聞いて、私は眩暈に襲われてしまった。

私はラフレシアの名前の通り、人を食ったような傘を恨めしく思いながら、傘を手に持つと土砂降りの雨の中、傘も差さずに家路を

急ぐのであった。

言うまでもないが、酔いはすっかり覚めてしまっていた。

了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1676h/>

世界に一つだけの傘

2010年10月8日15時33分発行